

戦後の歩み

弟子丸 香里奈（高校生）

今年、日本は戦後 80 年という大きな節目を迎える。80 年という年月は、私たち高校生にとっては想像もつかないほど長い。けれども、たった 80 年前、この国では当たり前のように戦争があり、人々の命や日常が失われていた。今の私が毎日学校に通い、友だちと笑い、家で安心して眠ることができるのは、戦争のない時代を生きているからだ。その当たり前が、過去には当たり前ではなかったことを、私はもっと深く考える必要があると感じている。

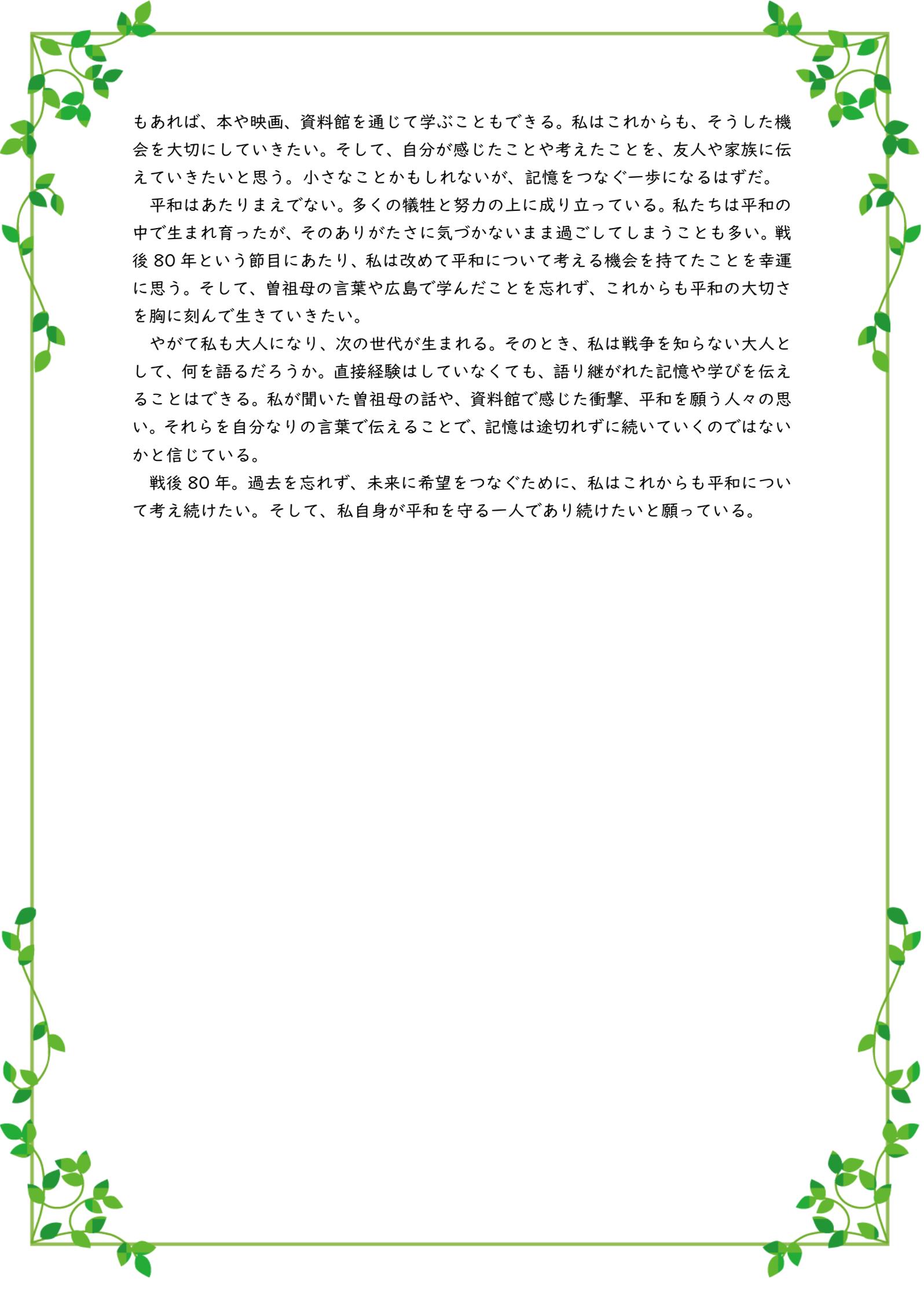
私は小学生のころ、夏休みの自由研究で戦争について調べる課題があり、私は大正生まれの曾祖母に話を聞いたことがある。当時の私は教科書に出てくる写真や映像でしか戦争を知らなかった。だが、実際に体験した人から聞く話は文字で読むものよりもずっと生々しく、心に残った。曾祖母は、空襲で空が赤く染まったこと、防空壕に隠れて耳をふさいでいたこと、食べ物がなくていつもお腹がすいていたことを、静かに話してくれた。泣きながら話すのではなく、淡々と話す姿はとても印象的であった。そのとき私は「戦争は本当にあったのだ」と実感した。

それから数年後、曾祖母は亡くなった。私が聞いた話はもう直接は聞くことができない。戦争を知る人たちは年々少なくなっている。戦後 80 年という節目は、同時に、戦争体験を語れる人がほとんどいなくなる時代が近づいていることを意味しているのだと思う。だからこそ、記憶をどう継承していくかが大切だと感じる。

私は、学校の授業で平和学習の一環として戦争に関する資料を読んだり、施設に行ったりした。爆撃で焼け野原になった街の写真や、家族を失った子どもたちの体験談は、教科書で見る以上に衝撃的だった。講話ビデオで語っていた方が、「憎しみではなく、平和への願いを語り続けたい」と話していたのが印象に残っている。その方は戦争で家族を亡くしたにもかかわらず、復讐や恨みを語るのではなく、二度と同じ悲劇を繰り返さないために、平和を願う気持ちを伝えていた。その姿に、私は強い衝撃を受けた。戦争の悲惨さを語ることは、ただ過去を思い出すためではなく、未来を守るために必要なのだと気づいた。

戦争を知らない私たちは、どうすれば記憶を受け継ぎ、次の世代に伝えられるのだろうか。私は、まず正しい知識を持つことが大切だと思う。歴史を学ぶことは、テストのためだけでない。なぜ戦争が起こったのか、その背景や原因を知ること、同じ過ちを繰り返さないための教訓を学べる。そして、その知識や学びを、自分の言葉で周囲に伝えることが、私たちの役割ではないかと感じている。

また、戦争の記憶を継承する方法は一つではない。語り部の方から直接話を聞くこと



もあれば、本や映画、資料館を通じて学ぶこともできる。私はこれからも、そうした機会を大切にしていきたい。そして、自分が感じたことや考えたことを、友人や家族に伝えていきたいと思う。小さなことかもしれないが、記憶をつなぐ一歩になるはずだ。

平和はあたりまえでない。多くの犠牲と努力の上に成り立っている。私たちは平和の中で生まれ育ったが、そのありがたさに気づかないまま過ごしてしまうことも多い。戦後80年という節目にあたり、私は改めて平和について考える機会を持てたことを幸運に思う。そして、曾祖母の言葉や広島で学んだことを忘れず、これからも平和の大切さを胸に刻んで生きていきたい。

やがて私も大人になり、次の世代が生まれる。そのとき、私は戦争を知らない大人として、何を語るだろうか。直接経験はしていなくても、語り継がれた記憶や学びを伝えることはできる。私が聞いた曾祖母の話や、資料館で感じた衝撃、平和を願う人々の思い。それらを自分なりの言葉で伝えることで、記憶は途切れずに続いていくのではないかと信じている。

戦後80年。過去を忘れず、未来に希望をつなぐために、私はこれからも平和について考え続けたい。そして、私自身が平和を守る一人であり続けたいと願っている。